

## 固定施設を使った運動遊びの指導に関する調査 －教師の知識習得の観点から－

### Investigation on Guidance of Exercise Play Using Fixed Facilities: From the Perspective of Teacher Knowledge Acquisition

岸 本 理沙子\* 筒 井 茂 喜\*\*  
KISHIMOTO Risako TSUTSUI Shigeki

本研究は、「固定施設を使った運動遊び」の指導の充実にに向けた基礎的知見を得ることを目的とし、小学校教師の「固定施設を使った運動遊び」で習得させる動き及び指導法に関する知識及びそれら知識の習得方法を調査・検討した。

その結果、多くの教師は「固定施設を使った運動遊び」の指導に関わる知識を文献やインターネット及び同僚から学んだり、また、自分で考えたりするなど自得的に身につけていた。また、「固定施設を使った運動遊び」の指導に関わる知識理解が不十分であり、教職経験を積み重ねるだけでは知識は身についていかないことも明らかになった。すなわち、「固定施設を使った運動遊び」の指導に関わる知識の習得を個人に委ねている現状では教師の指導力は向上しないであろうと考えられる。「固定施設を使った運動遊び」の実践的指導を大学の講義内容に加えること及び現場での研修の必要性が示唆された。

キーワード：固定施設、運動遊び、指導、知識習得

Key words: fixed facility, exercise play, guidance, knowledge acquisition

#### I. はじめに

小学校の体育科における器械運動領域は、小学校低学年で「器械・器具を使つての運動遊び」、中・高学年で器械運動を学習することになっている（文部科学省, 2018）。

器械運動は、マット運動、鉄棒運動及び跳び箱運動で構成されており、「回転したり、支持したり、逆位になったり、懸垂したりするなどの技に挑戦し、その技ができる楽しさや喜びを味わうことのできる運動である」と明記されている（文部科学省, 2018）。この器械運動は、「できる・できない」が明確に分かれる運動領域であるために、苦手とする児童が多く、その指導に困難さを感じている教師が多いと言われており、小学校体育における課題の一つとされている（清水ら, 2019）。

器械運動に必要な腕支持感覚・逆さ感覚・回転感覚・高さ感覚などの運動感覚や、姿勢を保持しながらの移行や着地などといった基礎的な動きは「固定施設を使った運動遊び」の中で培うことができる（高橋ら, 1989: 山本, 1997）。つまり、低学年の「固定施設を使った運動遊び」は、固定施設を使って楽しく遊ぶことを通して、器械運動につながる多様な動きを児童に経験させ、中・高学年で取り組む器械運動における技の習得及びその習熟を促す重要な学習といえる。また、そのためには教師が、器械運動につながる「固定施設を使った運動遊び」での動き及び指導法についての十分な知識を有する必要がある。

しかし、固定施設は幼稚園や小学校にしか設置されて

いないため、教師自身が中学・高校で経験することがなく、他の運動領域に比べ、学習時間が少ないと推察される。また、著者らが兵庫県近隣の4つの教員養成系大学に尋ねたところ、雲梯、ジャングルジム、登り棒、肋木などの固定施設は設置されておらず、「固定施設を使った運動遊び」は初等体育科教育法などの講義において、その目標、内容についての学修は行われているが、具体的にどのような動きが身につくのか、どのような指導法があるのかなど、実技を通した実践的な学修は行われていなかった。これに加え、兵庫県下5つの市町教育委員会に聞いたところ、有志の体育研究会などを除いて「固定施設を使った運動遊び」に関わる研修は実施していないということであった。

これらのことから、小学校教師は「固定施設を使った運動遊び」の知識や指導方法については、文献やインターネットから自得的に学んだり、現場に出てから自主的に参加する研修で学んだりしていると考えられる。もし、そうであるならば、教師によって「固定施設を使った運動遊び」の指導法にバラツキが生じていたり、正しくない指導法をとってしまっていたり、そもそも「固定施設を使った運動遊び」に関わる知識が十分に身についていない状態で指導をしていたりするのではないだろうか。そして、教師は「固定施設を使った運動遊び」の指導に困っているのではないだろうか。

清水ら（2019）は、小学校教師を対象に「器械運動の指導に関する意識」を調査し、「固定施設を使った運動遊び」は、器械運動系の中で最も指導が難しいと感じて

\*堺市立新金岡小学校

令和2年7月10日受理

\*\*兵庫教育大学大学院教育実践高度化専攻小学校教員養成特別コース 教授

いる教師が10%近くいたこと、「そもそも指導したことがない」という回答がみられたことから、「固定施設を使った運動遊び」に関する調査をさらに検討していく必要があるとしている。

そこで、本研究は、器械運動につながる「固定施設を使った運動遊び」の観点から、小学校教師の「固定施設を使った運動遊び」で習得させる動き及び指導法についての知識、また、それら知識の習得方法を調査、その内実を検討することで、「固定施設を使った運動遊び」の指導の充実に向けた基礎的知見を得ることを目的とする。

## II. 研究方法

まず、「固定施設を使った運動遊び」に関する質問紙を作成し、小学校教師を対象に質問紙調査を実施する。次に、質問紙調査の結果を整理検討することで、小学校教師の「固定施設を使った運動遊び」の指導法に関する知識などの内実を明らかにする。

### 1. 質問紙の作成

複数の固定施設を対象に質問紙を作成した場合、質問項目が多くなることで、回答者の負担が増し、回答の信頼性が低下することが考えられる。そこで、固定施設を一つに絞り、ジャングルジムを対象に作成することとした。ジャングルジムを対象にしたのは、雲梯の持つ水平梯子の構造、肋木と登り棒の持つ垂直梯子の構造を併せ持つ構造であり、多様な動きづくりができるということに加え、小学校における設置率が比較的高い（雲梯：10.6%、登り棒：8.7%、ジャングルジム：8.0%、肋木：3.2%）ことによる（独立行政法人日本スポーツ振興センター、2012）。

質問紙は以下に示す観点を問う内容で作成した。

- ・ジャングルジムで習得させる動きに関する知識
- ・ジャングルジムでの指導法に関する知識
- ・上記2つに関わる知識の習得方法

質問内容を作成するに当たっては、「ジャングルジム」での動きを「移動する」、「支持する」、「回転する」の3つのカテゴリーに分けて整理した後、「移動する」動きは、「垂直・斜め方向の登りおり」「とびおり」「水平方向への移動」に、「支持する」動きは、「静止」「振動を行えるもの」にそれぞれカテゴリーを細分化した。そして、細分化された各カテゴリー毎に、質問対象とする具体的な動き及びその指導法を「小学校学習指導要領解説体育編（文部科学省、2018）」及び「小学校体育（運動領域）まるわかりハンドブック（文部科学省、2012）」「鉄棒運動の授業（高橋ら、1989）」で示されている内容から導出した。その後、導出した動きに関する指導の有無及びその理由を問うことで「ジャングルジムで習得させる動きに関する知識」の習得状況を明らかにする項目、また、それぞれの動きを指導する順序及びジャングルジムの握り方、器械運動につながる下位運動を問うことで「ジャングルジムでの指導法に関する知識」の習得状況

を明らかにする項目、そして、これらの「知識の習得方法」を問う項目を作成した。

以上の手続きに基づいて作成した質問紙が資料1に示すものである。なお、質問紙には、「教職歴」と「固定施設を使った運動遊びの指導で知りたいこと」を問う質問項目を追加している。

## 2. 質問紙調査

### (1) 調査対象

兵庫県下の公立小学校5校の教師81名（教職歴5年未満：28人、5年以上15年未満：33人、15年以上：20人）。

### (2) 調査時期

2018年12月上旬から下旬。

## 4. 統計処理

教職年数による「固定施設を使った運動遊び」に関する知識の差の検定には一元配置の分散分析を用いた。なお、検定にはSPSS for Windows Ver.24.0を使用し、有意水準は5%未満とした。

## III. 結果と考察

### 1. ジャングルジムで習得させる動きに関する知識

表1（ア）（イ）は、質問項目2「ジャングルジムで習得させる動きに関する知識」の結果を示したものである。（ア）は習得させる動き別の「教える」「教えない」及び「教えない理由」におけるそれぞれの割合を示し、（イ）は「教えない」と回答した理由の項目「その他」の記述内容を示している。

（ア）に示すように、いずれの動きについても「教えない」と回答した教師が30%以上おり、「大の字とびおり」、「うつ伏せ支持」、「逆上がり」は、60-80%の教師が「教えない」としている。前述したように、これらの動きは、小学校学習指導要領解説体育編（文部科学省、2018）及び小学校体育（運動領域）まるわかりハンドブック（文部科学省、2012）において示されている内容である。すなわち、教えることが望ましいとされている内容であるが、「教えない」とする教師がこれほどまでに多くいるということである。

それでは、なぜ、これほどまでに「教えない」と考えている教師が多いのか、その背景をそれぞれの動き別に考察していくこととする。

### (1) くぐり登り、くぐり降り

「教える」と回答したのは、55.6%で、「教えない」と回答したのは44.4%であった。また、「教えない」理由として多かったのは、「このような動きができることを知らなかったから」（47.2%）と、「動きは知っているが、教える必要がないと思うから」（33.3%）であった。

「登り、降り」というのは、ジャングルジムの基本の動きである。また、「くぐる」という動きは、水平梯子と垂直梯子の両方の構造を併せ持つ、ジャングルジムでしかできない動きであり、「くぐり登り、くぐり降り」

表 1. 質問項目 2 ジャングルジムで習得させる動きに関する知識  
(ア) 動き別の指導の有無とその理由

	くぐり登り 降り	大の字 跳びおり	横這い 移動	うつ伏せ 支持	両手ぶら 下がり振り	逆上がり	
「教える」と回答した割合（％）	55. 6	40. 7	66. 7	19. 8	66. 7	35. 8	
「教えない」と回答した割合（％）	44. 4	59. 3	33. 3	80. 2	33. 3	64. 2	
教えないと回答した理由別の割合（％）	このような動きができることを知らなかった	47. 2	22. 9	37. 0	40. 0	29. 6	28. 8
	動きは知っているが教える必要はないと思う	33. 3	25. 0	37. 0	15. 4	37. 0	5. 8
	動きは知っているが自分自身が手本を示すことができない	8. 3	0. 0	3. 7	0. 0	0. 0	0. 0
	動きは知っているが児童が行うには危険だと思う	13. 9	52. 1	29. 6	41. 5	29. 6	63. 5
	動きは知っているがどのように教えていいのかわからない	2. 8	0. 0	0. 0	3. 1	3. 7	1. 9
	その他	2. 8	0. 0	0. 0	0. 0	3. 7	3. 8

\*教えないと回答した理由は複数回答可

(イ) 項目「その他」の記述内容

項目	記述内容
くぐり登り・降り	・そもそもそれ以前のことのできない子が多く感じるから。
両手ぶら下がり	・クラス全体には教えない。(危険だと思う)。
逆上がり	・逆上がりをさせるなら、まず鉄棒で指導してからだと思う。 これをさせるにしても、クラス全体には教えない。(危険だと思う) ・足が当たるので。

を「教える必要がないと思うから」という回答の背景には、ジャングルジムの特性及び器械運動につながるといふ教育的意義を理解していないことがあると推察される。また、「この動きを知らなかったから」という回答の背景には、教師自身が幼少期に経験をしていないことがあると推察される。子どもの運動の二極化が指摘されて久しいが、教師の中にも幼少期の運動経験が少なく、「固定施設を使った運動遊び」で多様な動きを経験することなく、教壇に立っている者が少なからずいるのかもしれない。また、これに加え、大学での講義及び現場の研修で学習する機会がなかったことも要因にあると考えられる。

(2) 大の字とびおり

「教える」と回答したのは40.7%で、「教えない」と回答したのは59.3%であった。また、「教えない」理由として最も多かったのは、「動きは知っているが、児童が行うには危険だと思うから」(52.1%)であった。この背景には、着地の際に児童が怪我をするのではないかと懸念があると推察される。しかし、接地時の衝撃を膝と足首を柔らかく使うことで吸収する「着地動作」は器械運動の種目であるマット運動、跳び箱運動、鉄棒運動のいずれにおいても必要となるものである。した

がって、器械運動でのケガの防止につながるとともに、器械運動の学習とのつながりを考えると、「着地」が危険であるからこそ、器械運動の前段階に位置づく「固定施設を使った運動遊び」において経験させ、着地技術を習得させることが重要であるといえる。教師が「大の字とびおり」の教育的意義を十分に理解していないのではないかと推察される。

(3) 横這い移動

「教える」と回答した人は66.7%で、「教えない」と回答したのは33.3%であった。また、「教えない」理由として多かったのは、「このような動きができることを知らなかった」(37.0%)と、「動きは知っているが、教える必要がないと思うから」(37.0%)であった。

「このような動きができることを知らなかった」という回答が多いことから、前述したように教師が幼少期に経験していないこと、大学での講義及び現場での研修がなかったことが、その背景にあると推察される。そして、「動きは知っているが、教える必要がないと思うから」という回答が多いことから、上下左右に自由に移動ができるジャングルジムの特性を捉えていないこと、また、この動きが器械運動の技の習得につながることを十分に理解できていない姿が窺われる。



#### (4) うつ伏せ支持

「教える」と回答したのは19.8%で、「教えない」と回答したのは、80.2%であった。また、「教えない」理由として多かったのは、「動きは知っているが、児童が行うには危険だと思うから」(41.5%),「このような動きができることを知らなかったから」(40.0%)であった。

「動きは知っているが、児童が行うには危険だと思うから」と「このような動きができることを知らなかったから」という二つの回答が多いことから、実際に教師自身が幼少期に経験をしたことがなく、この姿勢をとるまでの動作に危険性があると危惧しているためと推察される。しかし、高い位置で重心と上肢と下肢が水平方向に位置づくという姿勢は跳び箱運動、鉄棒運動、マット運動での動きで求められるものであり、「固定施設を使った運動遊び」で習得させておくべき動きである。

#### (5) 両手ぶら下がり振り

「教える」と回答したのは66.7%で、「教えない」と回答したのは、33.3%であった。また、「教えない」理由として最も多かったのは、「動きは知っているが、教える必要がないと思うから」(37.0%)であった。

「動きは知っているが、教える必要がないと思うから」という回答が多いことから、「両手ぶら下がり振り」は鉄棒で指導を行うことで充分であるという教師の考えが窺われる。しかし、鉄棒運動で発生する怪我の原因で多いものの一つに、鉄棒から両手を離れたことによる落下がある。このことを考えると、体の支持により鉄棒上に安定した姿勢をとる運動「両手ぶら下がり振り」は鉄棒運動を行う前に、「固定施設を使った運動遊び」で身につけさせておくべき動きといえる。

#### (6) 逆上がり

「教える」と回答したのは35.8%で、「教えない」と回答したのは、64.2%であった。また、「教えない」理由として多かったのは、「動きは知っているが、児童が行うには危険だと思うから」(63.5%),「このような動きができることを知らなかった」(28.8%)であった。

ジャングルジムを使った逆上がりでは、ジャングルジムの横棒を足で蹴ることで、常に鉄棒に腹部を接した状態で回ることができ、鉄棒運動の下位運動として捉えられている(高橋ら, 1989)。また、「教えない」と回答した中には、その理由として表6に示すように、「まずは鉄棒で指導を行ってからジャングルジムで指導する」という記述があり、ジャングルジムでの逆上がりが鉄棒での逆上がりの下位運動に位置しているという知識を持っていない教師の姿が窺われる。

(イ)に示す項目「その他」の記述内容では、「くぐり登り降り」以前のことができないので教えない」とい理由がみられた。しかし、立位姿勢で行うこの動きは、ジャングルジムの動きの中で最も基本に位置づくものであり、この動きができないということは、ジャングルジムに登って降りることができないということを意味

している。したがって、児童がこの動きができないのであれば、教師はスモールステップなど指導を工夫することで児童に身につけさせていくことが求められるといえる。

これまでに述べたように、いずれの動きも「教えない」理由として、「この動きを知らなかったから」、「動きは知っているが、児童が行うには危険だと思うから」、「動きは知っているが、教える必要がないと思うから」の3つが多く選ばれていた。

「この動きを知らなかったから」というのは、そもそも知識として持っていないということである。

前述したように、運動の二極化が指摘されて久しいが、教師の中にも幼少期における運動経験が少なく、教師自身が「ジャングルジム」での多様な動きを十分に経験していないのではないかと推察される。また、「児童が行うには危険だと思うから」という理由の背景には、教師自身が経験していないことで、その動きの危険性が実はよくわかっていないことがあるように思われる。

### 2. ジャングルジムの指導法に関する知識

#### (1) 指導の原則を押さえた指導

表2は、質問項目3(1)「ジャングルジムで習得させる動きの指導順」の結果を示したものである。

##### ①逆さおり・逆上がり・ふとん干し

児童にとって頭部と重心位置が逆転する逆位姿勢は恐怖心を伴う。したがって、逆位姿勢を指導する際は、恐怖心を和らげるために、重心位置を頭部より上に少しずつ上げていく中で動きを習得させることが求められる。つまり、設問1の指導順として正しいのは、「ふとん干し」→「逆さおり」→「逆上がり」となる。表に示すように正解者の割合は59.3%であり、半数近くの教師が誤答という結果であった。

##### ②ふとん干し・外登り・腕支持

体とジャングルジムが接している個所の数は、「外登り」は両手、両足の4箇所、「腕支持」は両手・腹部の3箇所、「ふとん干し」は、腹部のみの1箇所である。一般的に接している個所が多い方が体の安定性を保ちやすく、技の難易度は低くなる。したがって、設問2の指導順として正しいのは、「外登り」→「腕支持」→「ふとん干し」である。表に示すように正解者の割合は43.2%であり、60%近い教師が誤答であった。

上記2つの質問は器械運動を苦手とする児童が、その理由に挙げる「怖さ」を生む逆位姿勢と不安定な姿勢に対する指導の原則を問うものである。つまり、この原則に反して器械運動の指導を行うと、児童の中に恐怖心を生み、器械運動に対する苦手意識を芽生えさせる危険性がある。半数近い教師が指導の原則を理解していないと推察される。

表 2. ジャングルジムで習得させる動きの指導順

指導順		回答の割合 (%)
質問1	「逆さおり」→「逆上がり」→「ふとん干し」	0.0
	「逆さおり」→「ふとん干し」→「逆上がり」	14.8
	「逆上がり」→「逆さおり」→「ふとん干し」	1.2
	「逆上がり」→「ふとん干し」→「逆さおり」	2.5
	「ふとん干し」→「逆さおり」→「逆上がり」	59.3
	「ふとん干し」→「逆上がり」→「逆さおり」	22.2
質問2	「ふとん干し」→「外登り」→「腕支持」	8.6
	「ふとん干し」→「腕支持」→「外登り」	9.9
	「外登り」→「ふとん干し」→「腕支持」	29.6
	「外登り」→「腕支持」→「ふとん干し」	43.2
	「腕支持」→「ふとん干し」→「外登り」	3.7
	「腕支持」→「ふとん干し」→「腕支持」	4.9

## (2) ジャングルジムでの動きと鉄棒運動の技のつながりを考えた指導

表3(ア)は、質問項目3(2)「固定施設を使った運動遊びと器械運動との関連」の結果を示したものである。

(ア)に示すように、鉄棒運動の「逆上がり」を指導する際に、その前段階としてジャングルジムの「逆上がり」を指導すると回答したのは24.7%であった。つまり、7割以上の教師はジャングルジムを活用していなかった。

また、指導しない理由として最も多かったのは、「ジャングルジムでその動きを指導しなくても、無理なく鉄棒で習得させられると思うから」であった。

前述したように、「ジャングルジム」を使って行う「逆上がり」では、資料「質問紙の内容」項目3の(2)の図に示すように、「ジャングルジム」の横棒(図の①②③)を足で蹴ることで、常に腹部を鉄棒に接した状態で回ることができる。つまり、「逆上がり」ができない児童に最も多くみられる「鉄棒から腹部が離れることで回転できない」という躓きへの手立てとなる。さらに、技能が高まるにつれて横棒の①を蹴らずに②③を、もう少し技能が高まれば③だけを蹴って「逆上がり」をさせることができ、スモールステップを用いた効果的な指導法となる。

また、(イ)に示すように、指導しない理由の項目「その他」で最も多いのは安全面に関わるものであり、次いで知識に関するものであった。それぞれの記述例をみると、安全面では「ジャングルジム内での安全性がどのくらいなのか分からないから」とあり、そもそも指導したことがないという実態が窺われる。知識面では「ジャングルジムでの指導を思いつかなかったから」とあり、教師の知識不足がその背景にあると推察される。

以上のことから、多くの教師が「ジャングルジム」の構造的な特性から生まれる多様な動きと鉄棒運動の技との関連がよくわからないまま「固定施設を使った運動遊び」を指導していると推察される。

表 3. 固定施設を使った運動遊びと器械運動との関連  
(ア) ジャングルジムで逆上がりの有無

質問項目	逆上がり
前段階としてジャングルジムで指導する(%)	24.7
前段階としてジャングルジムで指導しない(%)	75.3
ジャングルジムでその動きを指導すること、鉄棒運動での技の習得に関連がないと思うから	6.6
指導しない理由(%) ジャングルジムでその動きを指導させなくても、無理なく鉄棒で習得させられると思うから	49.2
その他	44.3

## (イ) 項目「その他」の記述内容

カテゴリー	記述例	割合(%)
知識	・ジャングルジムでの指導を思いつかなかったから	28.6
安全面	・回転感覚をつけるのに効果的だが、危険ともなう ・ジャングルジム内での安全性がどのくらいなのか分からないから	42.9
恐怖心	・ジャングルジムでの逆上がりの方が怖がってできない子が多そうだから	10.7
場の確保	・ジャングルジムでは一斉指導がしにくいから	7.1
補助具	・鉄棒で逆上がり補助版で感覚をつかませたいから	7.1
指導順	・安全性ややりやすさを考えると、鉄棒からの逆上がりを先に指導する	3.6

表4は、質問項目3「基本技術について」の結果を示したものである。

表に示すように、正しい握り方(順手)を認識できているのは、「仰向け支持」では、69.1%、「前回り」では、98.8%、「足ぬき回り」では、72.8%、「逆上がり」では、58.0%であった。

ジャングルジムでの動きが鉄棒運動の技の習得につながることを考えると、ジャングルジムでも順手で握らせる必要がある。しかし、特に鉄棒運動の技の習得につながるのが高い「逆上がり」を逆手で指導すると回答した人が42.0%存在していた。「逆上がり」は、鉄棒運動で組み合わせ技を行う際の「上がり技」である。そのため、次の「中技」への移行をスムーズに行うには「逆上がり」も順手で行う必要がある。すなわち、鉄棒運動とのつながりを理解した上で、ジャングルジムにおける運動遊びの指導を行っていない教師が多いと考えられる。

表 4. 基本技術について

動き	握り方(%)	
	順手	逆手
仰向け保持	69.1	30.9
前回り	98.8	1.2
足ぬき回り	72.8	27.2
逆上がり	58.0	42.0

### 3. 教職年数の違いによる知識の差

表5は「習得させる動きに関する知識」及び「指導法に関する知識」、それぞれの質問に対する回答を得点化（いずれも12点満点）し、教職年数別に示したものである。表に示すように、平均値はいずれにおいても15年以上の教師が最も高く、次いで5年以上15年未満であった。しかし、平均値には有意な差はみられなかった。すなわち、教職経験を積み重ねるだけでは教師の「習得させる動きに関する知識」及び「指導法に関する知識」はそれ程高まらず、新任当初とあまり変わらない知識で指導していると考えられる。

表5. 教職年数による知識の差

	教職年数	平均値±SD (点)	F値
習得させる動きに関する知識	5年未満	4.36±3.85	0.399 ns
	5年以上 15年未満	4.50±3.68	
	15年以上	4.63±3.77	
指導法に関する知識	5年未満	4.36±1.36	0.716 ns
	5年以上 15年未満	4.50±1.22	
	15年以上	4.63±1.24	

### 4. 「固定施設を使った運動遊び」に関する知識の獲得方法及び知りたいこと

表6は質問項目4「固定施設を使った運動遊び」の指導に関する知識の獲得方法の結果を示したものである。表に示すように、最も多いのが「同僚などの人に聞いた」「自分で考えた」であり、次で「文献やインターネット」による方法であった。これらはいずれも40%を越えていた。一方、「大学の講義」「校内研修」という公的な場での学びはいずれも16%以下であった。すなわち、多くの教師は、「固定施設を使った運動遊び」に関わる知識を自得的に身につけていると考えられる。

表6. 固定施設を使った運動遊び」の知識の獲得方法

学習方法	割合 (%)
文献やインターネット	40.7
大学の講義	8.6
校内研修	16.0
有志の勉強会	3.7
人に聞いた（同僚など）	44.4
自分で考えた	44.4
その他	8.6

\* 複数回答可

表7は質問項目5「固定施設を使った運動遊び」で知りたいことの結果を示している。

表7. 「固定施設を使った運動遊び」で知りたいこと

質問内容	割合 (%)
固定施設で行うことができる動きの種類	58.0
「固定施設を使った運動遊び」によって身につく力	48.1
「固定施設を使った運動遊び」の指導順	42.0
「固定施設を使った運動遊び」と「器械運動」の関連	49.4
安全に配慮した指導	46.9
固定施設の歴史的背景	7.4
その他	0.0
特になし	2.5

\* 複数回答可

表に示すように、最も多かったのは「固定施設で行うことができる動きの種類」であった。また、「固定施設を使った運動遊びによって身につく力」「固定施設を使った運動遊びの指導順」「固定施設を使った運動遊びと器械運動の関連」「安全に配慮した指導」のいずれも40%以上50%未満の教師が知識として身につけたいと考えている。すなわち、教師の多くは児童を指導するには、今の知識では不十分なことを自覚し、学びたいと考えているといえる。

## IV. おわりに

多くの教師は「固定施設を使った運動遊び」の指導に関わる知識を文献やインターネット及び同僚から学んだり、また、自分で考えたりするなど自得的に身につけていることが明らかになった。また、「固定施設を使った運動遊び」の指導に関わる知識理解が不十分であり、教職経験を積み重ねるだけでは、知識は身につけていないことも明らかになった。すなわち、「固定施設を使った運動遊び」の指導に関わる知識の習得を個人に委ねている現状では教師の指導力は向上しないであろうと考えられる。

前述したように、子どもの運動における二極化が指摘されて久しいが、教師の中にも運動経験の少なさから自分自身にできない運動が多くあり、自分の運動指導に自信が持てない者が増えているのではないだろうか。

体育指導に自信がない若手教諭を対象に自主的に開かれている体育研修会を取材した新聞記事には、「自分に運動経験がなく、指導の引き出しがない。」と不安を口にする若手教諭の言葉が紹介されていた（朝日新聞, 2015）。

多くの教師が器械運動の苦手な児童が多いと感じるとともに、器械運動とのつながりを考えた場合、「固定施設を使った運動遊び」の重要さは認識しているが、自分の知識、指導技術に対する不安から十分に指導できないことへのジレンマを抱えているのではないであろうか。表7に示したように教師の多くが「固定施設を使った運動遊び」の指導に関わる知識を身につけたいと願っていることは、このような現状の裏返しとも考えられる。

「固定施設を使った運動遊び」の実践的指導に関わる内容を教員の養成段階に位置づく大学で習得させることに加え、育成段階に位置づく学校現場での研修の必要性が示唆される。

## 文 献

- 朝日新聞（2015）小学校体育の今（上）－運動の教え方，  
教えて－，10月18日，朝刊，13面
- 清水清志，塩原茂，金子伊樹，関口明宏，高橋珠美，新  
井叔弘（2019）群馬大学教育実践研究，群馬大学教育  
学部附属学校教育臨床総合センター，36，107-116
- 文部科学省（2012）小学校体育（運動領域）まるわかり  
ハンドブック，14-23
- 独立行政法人日本スポーツ振興センター学校災害防止  
調査研究委員会（2012）学校における固定遊具による  
事故対策防止調査研究報告書，24-25
- 文部科学省（2018年）小学校学習指導要領解説 体育編，  
東洋館出版社，45-50
- 高橋建夫，林恒明，藤井喜一，大貫耕一 編著（1989）  
鉄棒運動の授業（体育科教育別冊），大修館書店，14-  
29
- 山本貞美（1997）やる気と力を育てる体育の授業，明治  
図書，47-58



## 資料 1. 質問紙の内容

### 項目 1. 教諭歴について

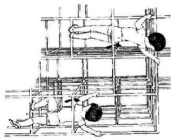
- ・質問「教諭歴は何年ですか、該当する年数に○を入れてください。」

5 年未満, 5 年以上 15 年未満, 15 年以上

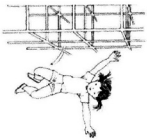
### 項目 2. 「ジャングルジム」で習得させる動きに関する知識について

- ・⑦から⑩の動きそれぞれについて、以下に示す質問を行った。

- (1) この動きを教えますか。
- はい
  - いいえ
- (2) 「いいえ」とお答えの場合、その理由に当てはまるものを選び、その番号に○をしてください。(複数回答可)
- このような動きができることを知らなかったから。
  - 動きは知っているが、教える必要がないと思うから。
  - 動きは知っているが、自分自身が手本を示すことができないから。
  - 動きは知っているが、児童が行うには危険だと思うから。
  - 動きは知っているが、どのように教えていいのかわからないから。
  - その他



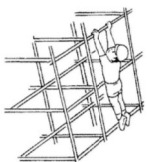
⑦「くぐり登り・くぐりおり」



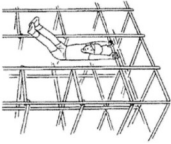
⑧「大の字とびおり」



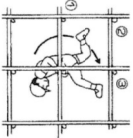
⑨「横這い移動」



⑤「うつ伏せ支持」



④「両手ぶら下がり振り」



⑦「逆上がり」

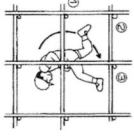
### 項目 3. 「ジャングルジム」での指導法に関する知識について

- (1) 指導順について

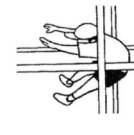
- ・質問「⑦～⑩の指導順を〔 〕に書いてください。」



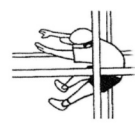
⑦「逆さおり」



⑧「逆上がり」



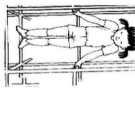
⑨「ふとん干し」



⑨「ふとん干し」



⑨「外登り」



⑩「腕支持」

- ・質問「⑦～⑩の指導順を〔 〕に書いてください。」

- (2) 「固定施設を使った運動遊び」と「器械運動」の関連について
- ・質問「鉄棒運動の「逆上がり」を指導する際に、その前段階としてジャングルジムでの逆上りを指導しますか、当てはまるものを選び、その番号に○をつけてください。」

- はい
- いいえ

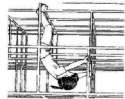


- ・質問「いいえ」と回答した方にその理由をお尋ねします。

- その理由に当てはまるものを選び、その番号に○をつけてください。
- ジャングルジムで「逆上がり」を指導すること、鉄棒での「逆上がり」の習得に関連がないと思うから。
  - ジャングルジムで「逆上がり」をさせなくても、無理なく鉄棒で習得させられると思うから。
  - その他

### (3) 基本技術について

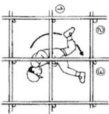
- ・質問「次の動きを児童に指導する際、ジャングルジムを順手で握らせますか、逆手で握らせますか。」



「仰向け保持」



「前回り」



「逆上がり」



「足ぬき回り」



「順手」



「逆手」

### 項目 4. 知識の習得方法について

- ・質問「固定施設を使った運動遊び」の指導に関する知識はどのようにして得ましたか。(得ていますか) 当てはまる番号に○をつけてください。(複数回答可)」

- 文献やインターネットから知識を得た。
- 大学の講義で知識を得た。
- 研修で知識を得た。
- 有志の勉強会等で知識を得た。
- 自分で考えた。
- 人に聞いた。
- その他

### 項目 5. 「固定施設を使った運動遊び」の指導について知りたいこと

- ・質問「固定施設を使った運動遊び」についてもっと知りたいと思うことはありますか。ある場合、それはどのような知識ですか。当てはまる番号に○をつけてください。(複数回答可)」

- 固定施設で行うことができる動きの種類について
- 「固定施設を使った運動遊び」によって身につく力について
- 「固定施設を使った運動遊び」の指導順について
- 「固定施設を使った運動遊び」と「器械運動」の関連について
- 安全に配慮した指導について
- 固定施設の歴史的背景について
- その他

- 特になし